

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

幼稚園番号	2023415
園名	日野台幼稚園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

砂遊び

<テーマの設定理由>

子どもたちが砂場で、山を作ったり、水をためてたんしんで遊んでいる。また砂の中の貝殻んどもを見つけている。半面汚れることがきになり、あまり取り組まないこどももいる。砂にふれて遊ぶなかで興味をふかめていきたい。

2. 活動スケジュール

- 8月・・・夏休みの経験を話すことから、担任の海に言った経験から大きな貝殻をみせる。話し合いのなかで幼稚園のすなばにも貝殻があることがでてくる。遊びのなかで貝殻さがしがはじまる。同時にきれいなしやいろいろなものをもつける
- 9月・・・砂場に新しい砂が運び込まれる。裸足になって感触を味わう
新しい砂といままでの違いを感じられるように促しながら遊び
そのことを話し合う。
話し合いから水がたまらないことに驚く意見がでる。
どうしたらたまるのか、試行錯誤してみる。
あなを掘ってみんなでいっぺんに水をいれるとすこしたまる。
- 10月・・・もっと水欲しいという意見からガチャポンプをあける。
たくさん水がでると水がたまりだす。かわづくりやおんせんづくりがはじまる。
- 11月・・・土をたらいにいれて土の感触をたのしむ お団子づくり。
どうしたらつるつるになるか、試行錯誤してみる
- 12月・・・乾燥してきて細かい粒子の白砂ができるようになる。
表面つるつるのお団子ができるようになった。

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定
- ・活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり 等を記載ください。

- 8月・・・貝殻さがし用のビニール袋、大きな貝殻を用意
担任の海にいて見つけた大きな貝に驚き声があがる。
「すなばでも貝殻みつけたよ。」「小さいの、みつけた」
「われたのは先生みたいにおおきいの。だったかも」
遊びのなかでたくさんのが貝殻さがしをはじめる。
なかにはきれいな石を見つけるこどももいる。
「みてみて」という声に気持ちを傾け、そのことを周りの子やクラスでも
話題にしていく。
- 9月・・・1、砂場に新しい砂が搬入されて山になっている。興味津々のこどもたち。
裸足になってみんなで砂場で遊ぼうというとき普段靴を脱ぎたがらないこどももぬいでいる。
山にのぼったり、ほってみたり、にぎってみたり、感触をたのしむ。
新しい砂はふわふわで驚きの声があがる。
水をかけたいという声があり、水をくんでみると全然たまらない。さらに驚く。感想を話し合う。いろいろな意見がでるが、なんでいままでみたいに水がたまらないのか、みんな不思議なようである。次は水をためてみようということになる。
- 2、どうやったらいいか、やってみることにする。穴をほるこども、みずをどんどんかけるこども。でもたまらない。みんなでいっぺんにやろうということになり、全員でやってみるとやっとすこしたまった。
しっかりたまらないことで満足感はすくなかった。
- 10月・・・天候もよくガチャポンプが出せる日ができた。こどもたちにつたえると、きょうはたくさんたまるかも！という期待感がある。たくさん水がでてくるとかわがで、たくさんみずがたまってくる。川をつくったり、温泉つくったりの水のなかにはいたり、遊びが盛り上がる
- 11月・・・たらい2個、水を入れたものと乾いた土を用意する。
泥の感触を感じながらあそぶ。お団子にすることができて白砂をかけるとぴかぴかになることを伝えるとぴかぴか団子をめざしだす。
ただこの日はつちにいろいろなものがはいたり、白砂があらく、とっておいしたものがわれたり、ごつごつしてしまう

どうやったらいいか。いろいろやってみます。土をふるいにかけたり、土を乾かしたり、どこの土ならいいのかいろいろほってみます。

白砂をかえることでお団子がわれなくなってくる。

12月・・・乾燥がつよくなると粒子のこまかい白砂ができるようになった。

「さらさら、ふわふわだ！」根気よくつづけているうちに磨くとつるつるになっていく。





4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

年少ということで話し合うことは難しいのではという心配があったが、こどもたちは自分の経験から一生懸命どうしたよいか、考える姿がみられた。またクラスの話題にすることで全員の共通の意図となり、クラスみんなの体験、まとまりにつながった。

見たこともないおおきな砂山にこどもたちはとても積極的になった。担任自身同じ砂でもこんなに違うのかとびっくりしたので、子どもと一緒にそのことを味わうことができた。そこから水をためるという目標ができた。あまりの水の吸い込みようにみんなおどろいたためだが、砂の量が増えたことと、踏み固められていない、ふわふわな状態なことがその要因とおもわれた。こどもたちは今までの経験から、「あなをほればいい」とか「いっぺんにいれよう」と提案があった。クラス全員がまとめていれるとすこしはたまったが、やはりすいこんでいくので、「たまった」という満足感はすくなくかった。見たこともない魅力的な砂山のおかげで砂を体験するということをみんなで楽しめたことは年少としてとてもよかった。

残暑や運動会の活動などがあり、その後、クラスとしては活動できずにいたが、10月になり、ガチャポンプを出せる日チャンスができた。みんなにガチャポンプをつかえることをはなすと前の活動から間があいたにもかかわらず、「たくさんみずがでてたまるかも」という声があがる。通常はじめてガチャポンプをあけるとガチャポンプを押したいという人が多いのだが、穴をほったり、「こっちにだして」と指示をだしたり、水をためることを意図する動きだった。前回の活動が印象深いことがわかった。

どろ団子づくりは担任自身思うようにできず、子どもと思考錯誤していった。繰り返していくうちに団子づくりもうまくなり、最初は泥の感触をたのしんでいたこどもたちもツルピカにしたいと根気強く遊んだ。12月になり乾燥が強くなると細かい仕上げの白砂ができるようになり、こどもたちも満足できる固いぴかぴか団子ができるようになった。

年少組の活動だったので砂はどこからくるとかという知識ではなく、体験していくことを重視して準備していった。魅力的なものだとこどもたちは本当に意欲的になることが今回とても印象的だった。年少の経験からこれから大きくなる中でもっと知識として探索していくことも出てくるだろう。今後が楽しみになった。